

「彼」は下宿の庭先で、いつも本を読んでいた。名は知らない。確か、ナントカという外国人の医者の子息である。

私は静かに読書する「彼」の姿を、向かいの窓からコッソリ眺めているのが好きだった。面と向かつて顔を合わせるでも、声を掛けるでもない。唯只管、コッソリと見下ろす。他にすることのない私にとつて、それは一等秘密の、後ろ暗い愉快の時間だった。

「彼」を知るまで、私は生身の外国人というものをチョットモ知らなかった。知らぬ故の愚蒙で、それは大変に恐ろしいものだと考えていた。しかし実際に目にした「彼」はどうだ。この世のものとは到底思えぬ雪の肌、月明かりを解いて集めたような銀の髪。ツンツルテンの袴から伸びる膺の美しさなどは筆舌に尽くし難く、ソヨと風に揺れる黄金色の産毛すらくらくらと眩暈のするほど麗しい。

「彼」はまた、私の自己肯定の象徴でもあった。私は「私」というものの存在——即ち自我、解りやすく謂うならば性癖を自覚した瞬間から、己の罪深さに惑い悩み続けてきた。同級の友がドコソコの女給と、などという話に花を咲かせている傍らで、女性性には興味の持てない自分を恥じていた。うつくしいもの、それをうつくしいと感じる心が私には欠落しているのだと、そんなふうに思ってきた。

人の謂う、嫺やかなうつくしさというものが私には解らない。勿論、艶やかな衣服を纏い優しく微笑む女性に心惹かれ

ぬわけではない。しかし、そういったうつくしさは私にとつてそれ以上でも以下でもなく、掻き立てられるような衝動と同義ではない。掻き立てられるような衝動とは無論、性欲である。

物心ついた頃から私のその手の関心は専ら男性性に向けられてきた。五高時代にポラト部などという汗臭い場所にわざわざ出向いていたのは、躍動する男性の肉体を堪能したいという邪な情念が働いたからに他ならない。体が弱く本の虫だった私でも漱石先生の足跡を辿る、などと嘯いていればそれを疑う者もなく、私はのうのと男性美の眩しさを目に焼き付けていた。自慰を覚えたのもちようどこの頃で、汗に塗れた禪の匂いを嗅いで己を慰めるといふ行為を繰り返していた。

だが、それが私にとつての命取りになったのだ。人氣の無い湖岸の小屋の中、一人愉しみに耽っていると人を人に見られた。狭い界限のことである。噂は忽ちの内に千里を駆け抜け、私は家の者からも頼むから出て行ってくれと懇願される憂き目に遭った。行きたくもない帝大へ入学したのはそんな経緯があったからだ。

「彼」を見つけたのは偶然だった。帝大をナントカ卒業し、食い繋ぐ為に新聞に小咄を投稿するようになった頃。「彼」は私の前に、まるで奇跡のように舞い降りてきた。

スラリと伸びた成長途中の手足は、一瞬にして私の目を奪

った。高慢そうな口元も、聡明さの滴るような項も、「彼」の出で立ち全てが私の心を捕らえて離さなかった。「彼」はとにかくうつくしかった。恐らく、私以外の者も皆そう感じるだろうという程度には。万人がうつくしいと思うのならば、等しくそれを想う私になんの異常があるものか。「彼」という人物によつて、私は己の劣等感をホンの少し拭い去ることができたのだ。「彼」のうつくしさを愛することの出来る私は、至極真つ当な人間なのだ。

「彼」は下宿の庭先で、今日も本を読んでいた。名は知らない。「彼」には時折、外国人の友人たちが訪ねてくることがある。同年らしき彼らは皆、一様にうつくしかった。けれども私の興味の先にはいつでも「彼」の姿がある。「彼」の透明なうつくしさを孤高の百合に例えるならば、他は薔薇やら桜やら、うつくしさの中に毒を持つ類の花である。私は百合が好きだ。清廉な佇まいを人知れず犯すような背徳感、それが好きなのだ。

*

見られていることを、ギルベルトは酷く意識していた。向かいの家の、二階の窓。暗がりの中で常に自分を監視する眼差しを、彼はここ数年黙殺し続けてきた。最初は気味の悪い奴だ、と思った。外国人が珍しいのか。それとも金を持っていると踏んで隙を狙っているのか。後者ならばトンダ思い違いである。金を持っているのは飽くまでも親爺であつて、自分ではない。

「大体俺見てたつて一銭の得にもならねえわ」

自嘲気味に咬いた言葉は、思いの外胸に刺さつた。時たま餌をやっている野良猫が甘えるようにミアンと鳴く。その頭を撫でてやると、仄かに花のような香りがした。もしかすると野良だと思つているのは自分だけで、本当はどこかで飼われている猫なのかもしれない。どちらにしても寄る辺があるのは良いことだと思つた。自分などよりは、よほど。

帰るに帰れない。この場合の帰る、は国にとつての意味だ。

本当ならば疾くに帰っているはずであつた。同窓の何人かと共に帝大に入り、今頃は国の医師養成機関にでも通つている予定であつた。卒業する必要性は必ずしもない。遠くない過去に母国が携わつたこの国の最高学府に入学し、箔をつけて帰国する。目的はただそれだけだつたのだ。物見遊山でついで来た親の方がこの国を気に入ってしまったのは誤算と謂えば誤算だが、だからといつて自分まで長々と残るつもりは毛